

邦銀オーバーバンキング問題の再考

埼玉大学大学院生 杉山 敏啓

1. 問題意識

オーバーバンキングは、銀行セクターが巨大（オーバー）であることが銀行経営不振の原因となって、金融システム脆弱性につながる懸念があるために問題として認識されてきたように思われる。1990年代後半から2000年代前半頃までは、銀行等の巨大な不良債権に起因する銀行経営不振があつてオーバーバンキング批判が展開された。だが最近では、銀行経営不振の原因が信用リスク要因から収益コスト要因へと質的に変化していると思われ、今一度オーバーバンキング問題について再考する意義があると考えられる。

2. 邦銀オーバーバンキング度合いの評価

オーバーバンキングが指すオーバーの観点、金融機関数、店舗数、預貸残高など論者によって異なることがある。本邦銀行セクターの機関数・店舗数は減少基調を辿ってきており、最近の水準は他の先進国と比較して巨大とは言にくい。貸出残高の対GDP割合は、わが国は2005年頃までは巨大と言えたが、最近の水準は先進国の中位程度になっている。要求払預金および市中現金の対GDP割合は、わが国は突出して巨大であり、しかもその突出ぶりは年々高まっている。

このように今日の邦銀がオーバーバンキングと思われる観点は預金超過にあり、イールドカーブ低下と相俟って金融機関の収益コスト構造の悪化を招き、最近では銀行経営不振の原因となっている可能性が考えられる。また預金超過の背景には国内利用者の現預金選好の強さや、同ニーズに呼応した本邦金融機関の過剰利便性提供にあるという仮説も考えうる。

3. 銀行セクター低収益性問題の原因

オーバーバンキング批判が生じる根底に、銀行セクターが低収益化して将来的な安定存続への懸念があるとするならば、わが国のオーバーバンキング問題と邦銀低収益性問題は同源と言える。その根本的原因に関する仮説を本研究では①低い手数料利益、②低いイールドカーブ、③預金超過・貸出能力過剰、④営業規模過剰の4点に整理した。

このうち預金超過に起因する低収益性問題について、手数料収入増強や市場金利上昇等による業務粗利益の拡大均衡が見込めない場合、銀行等は採算に合わない預金取引コストの削減という縮小均衡にも本腰を入れざるを得ないと思われる。

以上